

特集：高砂の歴史を歩き続けた 20 年

ー 唐津哲男さん ー

■ みなとまちづくりに関わったきっかけ

最初は、友だちの畑中さんに「新しい協議会ができるから出てくれへんか」と誘われたんです。内容は全然わからんまま会議に出たけど、話が難しくて最初はちんぷんかんぷんでしたわ（笑）。

でも、高砂には美術館も資料館も図書館も無い。

「まちづくりの場に入ったら、そういう施設を増やす意見も言えるんちゃうか」と思って、続けることにしたんです。

結局 20 年経ってもあんまり変わってへんけどね。

■ 印象に残っているエピソード

一番は、史跡に石柱を立てたことやな。

高砂には史跡がようけあるのに、現地に何の説明も無かった。ガイドしても「ほんまか？」と信用してもらえへん。それで「石柱を立てよう」と提案して、20 数本が建ったんです。

その時に痛感したのが、“歴史は一つの資料だけ信じたら危ない”ということ。

河合喜三郎の生誕地も、県の資料と実際が違ってて、戸籍まで調べ直して場所を確定したんです。あれはほんま、調べ直してよかった。

堀川の水の流れも、昔と今では全然違うことがわかったりして、調べるほど面白かったですわ。

■ 唐津さんにとってのみなとまちづくり

「町を元気にしたい」という気持ちで続けてきました。

かわら版を作って市民に活動を知ってもらったり、石柱で文化財を“見える化”したり。やってよかったと思うことは多いです。

でも、人口減少や空き家の増加、公共施設の不足…。路地に入ると草ぼうぼうで、廃屋も増えて、昔より寂しなったなあと感じます。

■ 未来への思い、次の世代へのメッセージ

「未来に望む」というより、今の大人が努力せんと、子どもに何も残せへんという気持ちの方が強いです。

高砂以外の地域にも石柱を立てたかったし、古民家を資料館や展示の場としてもっと活用できたはずやと思う。

休耕田や空き地の活用も、これからのまちづくりの大事なテーマやろうね。

ガイドは20年続けてきたけど、市のバックアップは少なく、ビューローと分断された感じもある。若い人がなかなか入ってこないのも課題です。

■ 今もガイド活動は続けておられるんですよね。

もちろん続けてます。松陽学園のゼミで展示したり、大学生に話したり、石の宝殿の案内も頼まれたら行きます。

毎年、相撲・神社・保存樹・道標などテーマを決めて調べて、作品展に出してます。

今年は初めて動画も使いました。80を超えたけど、できる限り続けたいと思ってます。